

7.9 青松葉事件 と 渡辺鉦次郎正陰

<参考資料>

事件は、慶応4年（1868年）1月20日午後4時頃、名古屋城内において起きた。
佐幕派の重臣、渡辺新左衛門、榊原勘解由、石川内蔵 允を「依朝命賜死（朝命に依りて死を賜う）」の名のもとに斬首という極刑が執行された。事件の対象者は、重臣から一般藩士まで、斬首14名、処罰20名に及んだ。しかも、いずれもいっさいの弁明の機会を与えられずにである。そもそも「朝命」というが、尾張藩内の事情であるなら、それを理由としなくてもよいはずであるのに・・・。

（1）事件発生当時の政治状況（年表参照）

慶応2年（1866）	6月 7日	第2次長州征討始まる。
同年	7月20日	将軍家茂、大坂城中で死去。
同年	9月 2日	幕府、長州と休戦を協定。
同年	12月 5日	慶喜、征夷大將軍・内大臣に任ぜらる。
同年	12月25日	孝明天皇、崩御。
慶応3年（1867）	1月 9日	明治天皇（14歳）、践祚 (天皇の死の直後に皇嗣が即位すること)。
同年	8月	名古屋地方で“ええじゃないか”の運動起きる。 その後、東西に広まる。
同年	10月13日	倒幕の詔書下る。
同年	10月23日	前尾張藩主徳川慶勝、名古屋城を発し上京。27日に着京。
同年	10月14日	将軍慶喜、大政奉還上奏。
同年	11月 8日	岩倉具視、尾張藩京都駐在御用達役林左門を招致、勤皇一本化を要請。左門、12日に回答を約す。
同年	12月 9日	王政復古の太号令下る。尾張徳川慶勝、議定職に就く。
慶応4年（1868）	1月 3日	鳥羽・伏見の戦起きる。慶勝異母兄弟、会津松平容保、桑名松平定敬、首謀となる。
同年	1月 7日	朝廷、徳川慶喜追討令を下す。
同年	1月7日頃	密使吉田知行、間宮外記の命を受け、在京中の慶勝のもとへ急行。
同年	1月12日	尾張家成瀬正肥、田宮如雲、小瀬新太郎、尾崎八右衛門、荒川甚作、丹羽賢、田中国之輔ら7重臣、岩倉具視に、国情を訴え、嘆願す。
同年	1月13日	名古屋生まれの開成所教授柳河春三、老中稲葉正邦に対し紀伊、水戸家などを援軍として幕軍の総抗戦を具申。
同年	1月15日	慶勝、姦徒誅戮・諸藩勤皇誘引を命ぜられ、即日離京。
同年	1月16日	成瀬正肥、離京。
同年	1月19日	慶勝、日程変更して清洲に仮伯、成瀬正肥と密談。

このような政治状況の渦中で事件は起きた。大きな時代の潮流のようなものを感じる。
「依朝命賜死」の名のもとに斬首、という悲劇的な事件の陰に権力的な陰謀すら臭う。

その事件の中で、渡辺正蔭^{まさかげ}の役割は何であったか？

渡辺新左衛門^{うちて}の討手には、渡辺鉞次郎（正蔭）が予定されていたが、同姓のために、榊原勘解由の討手に回った。柳生新蔭流の達人ということで、抜擢されたのであろう。

渡辺正蔭とは、年表に示すように、名古屋で天保5年（1834）に誕生。勤皇の志士。妻は、尾張柳生六代、柳生厳政^{としまさ}の妹。祖母は、柳生厳春^{としはる}の妹。

母の隆子は、若くして夫を失い、一人っ子の正蔭の教育に余勢力を注いだ。

正蔭は「酔々」と号し、酒好きな風流人であった。和歌の贈答、書（寺本郷学校の習字の教授）、画、茶の湯、菊作りなどを楽しんだ。儒学、国学を学び、神道を信仰した。

正蔭は、文武両道で、剣術、馬術、砲術、銃にも勝れていた。事件の時、正蔭は、34歳であった。

（2）事件名の由来

なぜ、「青松葉事件^{あおまつばじけん}」という名前でこの出来事のことを言うのだろうか？事件名は、処刑された重臣の筆頭格である渡辺新左衛門（在綱）の家が、「青松葉」といわれていたことからとっている。

渡辺家は、もともと徳川家康の家来で、「槍の半蔵」の異名をとった渡辺半蔵守綱の末裔であるが、鉄砲にも興味を持ち、その鑄造に用いる火を起こすのに青松葉を使ったとか、知行地から年貢を受けるとき、青松葉を俵に挿して数えたなどという逸話が多いことから、「青松葉の渡辺」といわれていたらしい。

（3）事件発生までの経緯（年表参照）

御三家である尾張徳川家、紀州徳川家、水戸徳川家には、御附家老^{おつきかろう}というものが存在した。御附家老とは、将軍家から派遣された藩主のお目付役であり、尾張では、成瀬隼人正家、竹腰兵部少輔^{たけのこしひょうぶしょうゆう}家が知行高も大きく有名であった。藩主も遠慮しなければならぬ家柄から、その権力は強大であり、藩内は自然と成瀬派と竹腰派に分かれた。幕末のこの時期、より佐幕的な立場をとり続けたのが竹腰派で、「ふいご党」と呼ばれ、尊皇攘夷を唱える「金鉄組」は成瀬家に近かった。

14代藩主徳川慶勝^{よしかつ}は、就任以来尊皇攘夷の立場をとり、特にペリー来航以降藩政の刷新を進める中で竹腰家をはじめとする「ふいご党」と対立することが多かった。安政の大獄で、慶勝が隠居すると、「金鉄組」は没落し、竹腰兵部少輔が新藩主茂徳^{もちなが}のもとで藩政を取り仕切った。桜田門外の変以降、竹腰兵部少輔は失脚、慶勝が隠居の身ながら藩政の前面に出、「金鉄組」とともに頻繁に上洛して政局にあった。

その間、茂徳が隠居して慶勝の子義宜^{よしのり}が16代藩主となり、「ふいご党」は日の目を見なかった。

大政奉還後、慶応4年（1868）1月3日から5日にかけての鳥羽・伏見の戦いで幕府軍は、敗北した。その一報が届くと、京都に派兵するかどうかで、派兵を主張する「金鉄組と派兵に慎重な「ふいご党」との対立が深まった。このとき、京都にいた慶勝は、手勢を率いて上洛した監察吉田知行から、城代間宮外記の言付けという形で尾張藩内の情勢を聞き、1月15日に京都を発ち、20日に帰国している。

(4) 事件の発生原因

幕末の藩内抗争で長く一種の箝口令^{かんこうれい}が布かれた例として、尾張藩の「青松葉事件」があげられることがある。したがって、歴史家は、事件に触れることを避けてきたようである。結果、いろんな説があって、どれが真実か定かではない。

1) 「ふいご党」の幕府軍加勢説

江戸在府中の竹腰兵部少輔の呼びかけに応じ、「ふいご党」が幼君義宜^{よしのり}を擁して江戸に向かい、幕府に加勢する、という動きがあったという説。

監察吉田知行が城代間宮外記の内報として慶勝に知らせた内容がこれである。

2) 岩倉具視と「金鉄組」による謀略説

当時、慶勝は徳川慶喜の辞官納地問題に際し、領地返上に反対の立場をとっていた。これに対して業を煮やした岩倉具視が、「ふいご党」の加勢説を「金鉄組」の家臣と共謀してでっちあげ、または噂を利用して、「朝命」の名の下に慶勝に旗幟^{きし}を鮮明にするよう脅迫した、というもの。

3) 東海軍前進の障碍を肅正説（徳川慶勝の保身説）

「戊辰役戦史（上）」（大山柏著）は、「東海道鎮撫総督府（＝東海軍と略称）の前進において、東海道の人的障碍を見ると、徳川御三家の一なる徳川義宜がいるほかは、大大名は殆どなく、わずかに小田原の大久保忠礼があるばかり。したがって、この両藩を片付ければ前路に障碍はない。」とし、「尾張藩の肅正と東海軍の前進」で、「この形勢を見た慶勝は、1月15日に京都を発ち、官軍が名古屋に到着する以前に肅正を実施せんとし、19日清洲に到着し肅正実施の計画を立て、20日名古屋に入城するや否や、電光石火のように手早く佐幕党の首魁^{しゅかい}3名、引き続き数日の間に11名斬首し、佐幕党を一掃した。これがため、藩論は統一されたばかりでなく、積極的に出兵、各地に転戦した。勤皇論に徹しているのでその兵も強く、各地で勇戦している。」という説。

しかし、まだ幕府の敗北が固まった時期ではないため、少々疑わしい。

そのほか、4) 長州藩の復讐説、5) 薩摩藩の復讐説と枚挙^{まいきよ}にいとまがない。

(5) その後

この事件の後、尾張藩は官軍の一員として各地で幕府軍と戦った。天領及び譜代の多い東海の諸藩、代官が日和見の立場から中立的に変化したのは、尾張藩誘引使が勤皇詔書を出させた功が大きい。しかし、それによって得られた対価は、あまりに少なかった。

新政府内での立場でも、有力な官職には尾張藩士の姿はほとんどなく、薩長土肥に独占された。その後も、大臣までなったのは、田中不二麿（国之輔）と加藤高明だけであった。

渡辺正蔭は、「青松葉事件」後、日本各地を東奔西走、縦横無尽の大活躍であった（年表参照）。

明治2年（1869）10月8日には、名古屋藩権大参事に任命され、要職を務めている。

明治4年（1891）9月には、正蔭（38歳）、明治維新の勲功として永世賞典禄^{しょうてんろく}230石を下された。

明治4年（1891）12月頃、給禄を返上した渡辺正蔭は、中島村5番屋敷（荒古）に帰田、移住している。

明治5年（1872）8月に平井村常光院に寺本郷学校が設立され、正蔭は習字の教授に任命された。また、永世賞典禄の中より、年々30人分の奨学金を寺本郷学校に寄贈した。

明治6年（1873）3月、正蔭（40歳）、愛知県大7大区（知多郡）長に任命される。

明治7年（1874）8月、正蔭（41歳）友人と酒宴後に信濃川（藪川）にて水泳中、痙攣を起こして溺死。堀切にあった墓地が今は、野崎に移されている。その墓地の入り口の正面に正蔭の碑が建てられている。

参考文献

水谷盛光著「実説・名古屋城青松葉事件－尾張徳川家お家騒動－」

水谷盛光著「尾張徳川家明治維新内紛秘史考説－青松葉事件資料集成」

城山三郎著「冬の派閥」新潮社刊

早川佳宏著「勤皇の志士 渡辺正蔭の生涯」

Wikipedia 「青松葉事件」